

【尾瀬紀行】

平成 25 年 7 月 11 日（木）～7 月 12 日（金）

7 月中旬、雪月風花の宝庫と云われる尾瀬をハイキングすることになった。はじめてこの地を訪れる小生であるが、同行の 10 名すべてが、幾たびか訪れたというハイキングの名所である。今回のハイキングは、まさに初心者コースで、来年古希を迎えるわれわれには丁度よい「歩きんぐ」だ。7 時 30 分、新宿を出て、関越自動車道を沼田インターまで行き、片品村を経て戸倉に着く。そこでバスを乗り換え、奥利根ゆけむり街道を鳩待峠まで登坂して下車。尾瀬の玄関口の鳩待峠には、これから尾瀬に向かう人、尾瀬を楽しんできた人たちで賑わっていた。道標に従って尾瀬ヶ原の基点山ノ鼻に向う。岩が敷き詰められている下りの山道を 30 分ほど行くと、緩やかな傾斜の木道になり、快適な歩行を楽しめた。鳩待峠を出発して約 1 時間、国民宿舎や至仏山荘が立ち並ぶ山ノ鼻に丁度ランチタイムに到着。名峰至仏山が望める草原の一角のベンチで各自用意した昼食を取る。

休息と腹ごしらえをして、次のランドマーク牛首に向かう。この時間帯は多くのハイカーとすれ違う。「こんにちわ！」挨拶を交わしながら、尾瀬の風景を満喫して歩みを進める。木道の両脇には、黄金色のニッコウキスゲや紺青のカキツバタが群生していて、気分を爽快にしてくれる。木製の休憩ベンチが作られている牛首十字路で水分補給して、次は龍宮小屋方面へ向う。歩く正面には名峰燧岳が広い草原の遥かに聳えている。天気は快晴、気温も 24～25℃ほどで、都心の猛暑を思うと別天地の世界だ。尾瀬ヶ原の真ん中より少し東側で、群馬県が一番北に位置するという龍宮小屋を右手に通り過ぎて、ひたすら木道を進んでいく。この辺りに来たら前にも後ろにも他のハイカーの姿が見えなくなっていた。広い草原を望むと「この広い野原いっぱい」の歌が浮かんでくる。ハーモニカでこの曲を奏でる。これまた気分上々である。大自然を映くスペクタクル映画にわれわれ一行が主役を演じているように思える光景だ。こんな感傷に耽っている間に、今夜の宿泊地、見晴の尾瀬小屋に辿り着いた。

初夏のシーズンは、何時も満室で相部屋になるという山小屋だが、幸運にも宿泊客が少なく、男女ともどもわれわれ一行だけで 1 部屋を使えることになった。時間は夕刻になっており、早々にひと風呂浴びて、夕食を取った。夕食後でもまだ陽は高く、小屋の外にあるラウンジで、一献傾けながら、本日の行程を振り返ることにした。青春時代に戻ったような和気藹藹の談笑で尾瀬の夜を満喫した。

翌朝は、6 時の朝食前に、小屋の周辺を散歩して、ほのかにひんやりした涼風を受けながら、朝靄の中に浮かんでいるような山々の幻想的な光景に喜びを感じ入った。昇りくる朝日は神々しく自然と合掌して拝みました。本日も晴天のようだ。朝食をたっぷり食べて 6 時 50 分、小屋の主人に礼を述べて出発だ。朝露を含んだ草花を觀賞しながら東電小屋へ向かう。昭和 2 年に只見川の水質調査や気象観測を目的にして作られた小屋で、後に東京電力が入山者に開放して今日の山小屋になっているという。ここで小休止し、コンディションを整えて次に進む。しばらく行くと水量の多い清流に差し掛かり、吊り橋が架かっ

ている。尾瀬の名所、ヨッピー吊橋だ。ヨッピーとはアイヌ語で「呼び」「別れ」「集まる」といった意味があるそうだ。広い草原のような木道の両岸には所々、小さな湖沼が見える。いま辿ってきた道を振り返ると燧岳が悠然と聳えている。その燧岳が湖沼を鏡にして映っているが、これを逆さ燧というのだそうだ。この光景をカメラに収める。しばらく行くと何組かのパーティが休息しているところに出た。昨日通った牛首の十字路だ。これから先は、昨日歩いた道で、遠く真正面に至仏山を眺めながら進み、山ノ鼻に到着だ。沢山のハイカーたちの中に子どもたちが、「こんにちは！」とあいさつしてくれたので、お礼にハーモニカを吹いて聞かせたら、はじめて見る楽器とかで、興味深く聴いてくれた。尾瀬名物の80kgの荷物を担ぐ歩荷の姿も見られた。ここで身支度を整えて出発し、これから先の鳩待峠までの上り坂に汗をかき、足の疲れも感じるころ、峠に辿り着いた。2日間のハイキングを無事終了した。

この後は、戸倉で入浴して汗を流して、昼食を取り、バスに乗りこんで帰路に着いた。昼食の「天盛りそば」の天ぷらがあまりにもジャンボなので一同大笑いをしたのも楽しかった思い出の一つである。

好天に恵まれ、身も心も洗淨できた気分の楽しいハイキングでした。(石井義文)